荒木山通信

2021年8月
第12号
北房文化遺産保存会

案内看板を設置
主要遺跡に十一基

残暑お見舞い申し上げます。

猛暑続きの過酷な夏が過ぎましたが、依然としてコロナの脅威に晒されている昨今です。お変わりなくお過ごしでしょうか？お伺い致します。

さて、本会では令和三年度の主な事業を「西の明日香村・道しるべ整備事業」とし、その資金の確保に努めておりましたが、前号でお知らせしておりますように八十万円の篤志寄付を戴き、中国建設弘済会からの補助金二十万円と合わせて百万円以内で主要遺跡の案内看板十一基を整備することに致しました。（看板設置一覧表をご覧ください。）

そして、遺跡を巡る道の一つとして郷愁漂う美しい山里の道を「山の辺の道」として設定しました。この道の南の分岐点は清常集落に在る「塩川の泉」に入る市道と国道の分岐点、北は高野工業横の十字路から南への入り口で上水田地区はいわゆる南部線を通過し中津井の街を経て定集落を通っています。この道についても案内看板を計画していますが令和四年度以後の課題としています。

【看板設置一覧表】

設置遺跡名	設置数
英賀廃寺跡	2
荒木山東塚・西塚古墳	3
立一号・二号墳	1
(伝)玄賓僧都生誕地	1
下村一号墳	2
菊池家墓所・告部教諭所跡	2
計	11.

なお、この事業のもう一つの柱は「散策マップの作成」ですが、これについても来年度以降の実施になりました。

この事業を通して、北房を訪れる人々がマップを片手にのんびり散策して、美しい山里に眠る古代の遺跡や里人の温かい人情に触れていただき「北房はいい所！」とリピーターになっていただけることを願っています。

そして何より、地元に暮らす私たちが身近にある文化遺産に関心を持ち、故郷の誇りとしたいと思います。

たびたび紹介していますように北房は西日本で稀と言われる古墳群のほか全国一を目指すホタルの里であり、周囲の山並みには佐井田城をはじめ中世の山城が鎮まるなど、たくさんの宝物があります。私たちはこれら故郷の宝物を大切に護るとともに時代を担う子どもたちに伝えたいと思っています。

多くの方々のご参加と協力を願ってやみません。

真庭市が二年度に十三基を整備

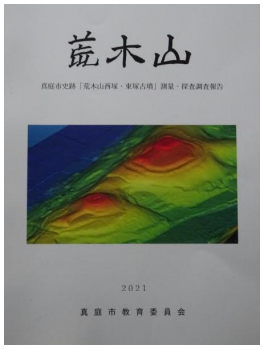
真庭市は令和二年度に「ふるさとセンター」「大谷一号墳」「定古墳群」「荒木山古墳群」など十三基の案内看板を設置、改修しています。当会では、こうした真庭市の事業とタイアップして看板の設置を進めることとしています。

荒木山の清掃は継続

当会は、本年三月に荒木山の柴掻きや草刈りを予定していましたが、予備日も雨天となったため中止としました。柴掻きの時期等を勘案し、来年春三月には清掃活動を行う予定です。

なお、四年に西塚古墳の現地調査が計画されていることから事前の清掃が予定されています。

荒木山西塚・東塚古墳測量・探査調査報告書「荒木山」発行



平成三〇年度・令和元年度に行われた荒木山西塚・東塚古墳の調査報告書が本年三月、真庭市教育委員会から発行されました。調査に至る経緯や調査の概要・測量調査やレーダー探査等の成果が載っています。

なお、北房公民館講座「まに大附属ふるさと研究所」での活動の様子などを楽生として活動に参加した本会会員の奥田健治氏が写真や図などを入れ、分かりやすくまとめています。北房図書館にも置いてありますので、またご一読ください。

※　北房振興局で六〇〇円で販売しています。

特別寄稿

浅き夢みし　酔ひもせむ
～謎の定四号墳出土鉄板～

真庭市教育委員会生涯学習課主幹　新谷俊典

十五年前の夏、私は定北古墳のさらに上方にある定四号墳の発掘調査を行っていた。合併翌年の平成一八（二〇〇六）年、教育委員会では北房に存在する希有な終末期古墳群「大谷・定古墳群」の国指定を目指し、未調査であった定四号墳・五号墳に発掘のメスを入れることとなった。担当の一人として、私は四号墳に携わったのである。

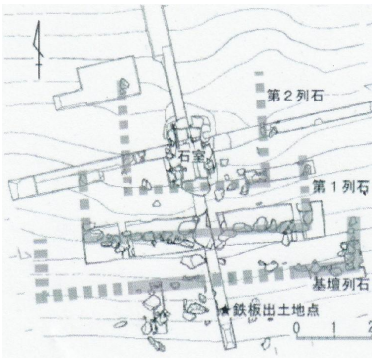
発掘の結果、定四号墳は、七世紀末から八世紀初頭（約一三〇〇年前）に築かれたと考えられる、小型の横穴式石室を有する方墳であることが判明した。古墳の大きさは、一〇m×八mと、石室同様に小規模だが、作りは実に精巧であった。二段築成の墳丘は、その前面を「列石」と呼ばれる石組みで化粧し、さらに墳丘の外側にも列石を備えた基壇が取付けられていた。

また、古墳の中軸線は真北方向に概ね一致し、当時の尺度を用いて設計されていることも推定された。これらのことは、四号墳が大谷一号墳や定北古墳とも共通する高度な設計・技術により築かれたことを物語る。まさしく「大谷・定古墳群」の一員であり、六基の古墳群の末尾を飾るにふさわしい古墳である。

そして、古墳と言えばやはり気になるのは出土品であろう。石室内部、墳丘部分に設けた各トレンチの発掘では、調査作業員の津田悦子さん、池田智恵子さんのお二方に、掘り上げた排土をフルイにかけてまで探索いただいたが、残念ながら出土品は何一つ発見されなかった。

【定四号墳の場所】

【定四号墳平面図】



ところが意外な所から発見は訪れる。調査終盤、古墳の築造過程を解明するため、基壇外側で地山（盛土などの下にある旧来の地層）を確認すべく勢い良く掘り下げていたところ、「カチッ」という金属音がした。何かと思い周囲を注意深く掘り下げると、地山上面に貼り付く様な状態で鉄製品らしきものが姿を覗かせた。取り上げてみると、縦三二cm×横二〇cm×厚さ三mmの長方形の鉄板であった。

「なぜこんなところに鉄板が？」という疑問を抱いたまま、鉄錆の下部に鋲や加工の痕跡がないか、岡山県古代吉備文化財センターに依頼しX線写真撮影を行ったが、残念ながら何も確認できなかった。結局、発掘調査の報告書には「鉄板状の不明鉄製品」というお茶を濁した記述に留めることとなった。とは言え、縦三二cmは、当時の一尺＝二九・七cmに近似し、三mmという極薄の鍛造品であることなど、この鉄板には通常の出土品と異なる違和感を感じており、何とも消化不良の感が否めなかったことはよく覚えている。

【定四号墳出土鉄板】
真庭市教育委員会蔵

その後しばらくして、全国の古代遺跡で鉄板の出土例があることを論文で知った。論文の著者である小林義孝さんによれば、鉄板が出土した遺跡は三四遺跡あり（平成一〇年時点）、火葬または土葬による八世紀から十世紀の墳墓からの出土だそうだ。その性格も様々で葬送や造墓に伴う儀式に深く関わるものと考えられているが、中でも「墓誌」または「買地券」と判断できるものが含まれることは注目される。

「墓誌」とは、葬られた人物に関する氏名、生没年や生前の活躍などを記録したもの。骨蔵器・塼・短冊形や長方形の金属板に刻銘される。最古の墓誌は銅製で七世紀後半に遡るが、大半は八世紀以降の所産である。一方、「買地券」とは、墓を作るために、土地の神様から墓地用の土地を買い取ったという売買証文である。八・九世紀代のものが国内で数例見つかっている。いずれも八世紀以降の墳墓から出土するのが一般的である。確実に古墳に伴う墓

【美努岡万墓誌】
奈良時代の貴族・美野岡麻呂（六六一―七二八）の銅製墓誌。定四号墳出土の鉄板と大きさが近似。重要文化財。

誌や買地券は全国でもまだ事例がない。四号墳の鉄板は、地山上面からの出土で、墓誌より買地券に近いと考えられる、決め手となる物証もなく、その性格は謎のままである。

不意の発見から十五年、「出土品分析の技術が進歩すれば、いつか鉄板に記された文字が見えるようになるのでは・・・」という浅い夢は今も消え失せない。

※塼：土製の板

名利を求めず足を知る
玄賓法師の話

北房文化遺産保存会
顧問　戸村彰孝

平安の昔、都の喧騒をさけ伯耆や備中の山中に修行の場を求めた僧があった。その名を玄賓という。後世、東国高僧伝や日本後記・続古今集・発心集などにその名を留め、近年には日本奇僧伝・陰徳のひじり玄賓などが発刊された。

彼の出自は河内国の弓削氏といわれるが、一説に備中国英賀郡水田郷とも伝えられる。北房文化遺産保存会は近々、西の明日香ロードの一角に玄賓生誕地の道しるべを設置する。

彼は称徳女帝に親愛・崇敬され皇位を伺った道鏡一族であったことで生涯心の傷を負っていたとも云われる。しかし、発心して法相宗興福寺の官僧となった玄賓は、仏教学と共に五明教学の薬学・医学・工学など学び学識は若年にしてすでに高く将来を嘱目される存在であった。だが彼はその道を選ばなかった。

【玄賓坐像】国宝
興福寺蔵（鎌倉時代初期）

鴨長明が著した発心集に三篇の逸話がある。その一話。桓武天皇から僧綱（僧侶の任免、監督官庁）の大僧都の官位を授けられた時、

“三輪山の清き流れにすすぎてし　衣の袖をまたはけがさじ”と答えてこれを辞退し身をくらまし、越の国で大川の渡守になった話。第二話は、伊賀の国の郡司の召使いになっていた時、主人が国司と意見対立の末国外追放となった時、その窮地を救った話。第三話は、大納言何某の北の方に懸想したが自ら不浄観を絶った話である。いずれの話も俗界を出離した清貧な玄賓の話である。

山林修行は本来、出家者の冥想と菩薩行の道場であったが、私度僧の逃避と乱行の場として悪用されるに至り奈良時代末期に禁止されたが桓武帝の時代に再び復活した。

奈良から長岡京へ更に平安京へと遷都を重ね北方のアイヌ系討伐をおこして民衆は疲弊、その上に旱魃や疫病などの天災が重なり、後世の者が平安時代を平和な世と観じたとすれば錯覚だと云えようか。

桓武天皇第二王子嵯峨天皇は平安の三筆としても知られるが、この時代山林修業僧で遣唐学僧として頭角を現し始めた天台の最澄、真言密教の空海の名を知らぬ者はなかったが、独り備中や伯耆の山中に世を避け“清らかな曲澗に流れ、柏の古木断崖に倚る”（西遊記）という環境に独座する玄賓に帰依したのは嵯峨天皇だけであった。天皇は最澄や空海に個人として布施をすることはなかったが、閑居していた玄賓には度々慰問の書状や布帛を贈った。玄賓は行基の大工事や空海の満濃池のような大事業はしなかったが、山林周辺の人々の病を治し、治水の溝や堤をつくり、案山子を作って作物を保護するなど地味な福祉に貢献した事蹟が伝承として各地に残されている。

伝灯大法師玄賓死去す。行年八十有余。弘仁九年（八一八）六月十七日

嵯峨天皇は玄賓の死を悲しんで「賓和尚に哭す」という七言絶句の漢詩を文華秀麗集に収めた。

「大士は古来住著なく、名山に跡を晦めて風霜に老ゆ・・・」

玄賓の残した歌の中で最も心情をよく表していると思われる歌一首をあげよう。

“浅くとも世に汲む人はまたもあらじ　我に事足る山の井の水”

新見市花木の大椿寺に伝わる歌で、彼が残したという五唯足の寺紋は今も生きている。「知足」の語は大般涅槃経に由来する。

“既に出家し己りて悔ゆる心を生ぜざる。これを知足と名づく。”と説かれている。

「玄賓僧都生誕之地」の石碑　地元の有志の手で平成８年に建立。真庭市上水田。

古墳の築造年（上）

前方後方墳の荒木山東塚古墳は、真庭市内では最古の古墳とされている。ところが、発掘調査はされておらず、遺物などは何も発見されていないのである。ではなぜ、市内で最古の古墳とされ、さらには、吉備中枢部を含めた県内最古級古墳の中の一つにまで挙げられているのか。

『北房町史　通史編上』の第一章を執筆された平井勝氏は、「前方部がバチ形に開く古墳は他に奈良県箸墓古墳や、岡山市浦間茶臼山古墳などの前方後円墳にも見られ、最古の古墳の特徴の一つと考えられている。従って、荒木山東塚古墳の前方部の形態も同じであることから、ほぼ同じ頃築造されたと推定」している。実は、根拠はこれだけなのである。平井氏も、「墳丘の形を手掛かりに時期を推定するほかない」と、同書に記述している。なお、バチ形とは三味線の撥のように先が開いた形をしていることから命名されている。

また、近藤義郎氏が編集協力された『吉備の古墳』によれば、荒木山東塚古墳は、「バチ形前方部をなすこと、後方部が墳丘主軸方向に長い長方形をなすことなどから備前車塚と同時期か、それに後続する前期でも前半の古墳と考えられる」と記述されている。

では、その備前車塚古墳は、どのように説明されているかといえば、「鏡が中国鏡のみであることや、前方部が撥型に開く形態であることから最古段階の古墳と考えられる」と記されている。なお、中国鏡とあるが、この古墳からは、十一面の三角縁神獣鏡が発掘されている。

さて、こうしてみると、いずれの説明文にも何世紀頃の築造である、という言葉さえ出ていない。ところが、前述の『北房町史』には、「北房の首長墳の変遷」として、図が示されていて、荒木山東塚とそれに続いて西塚古墳が、「三世紀終わり頃から四世紀」の枠内に示されている。

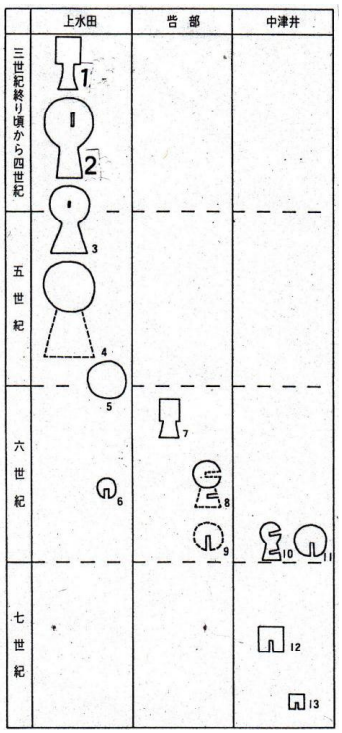
一九八〇年代以前には、古墳時代は四世紀に始まるというのが定説的理解であるとされていた。しかし、その後の鏡研究等の進展により、三世紀中頃、二五〇年前後とする見解が有力視されてきたという経緯がある。つまり、古墳時代の始まりの時期の定説が、半世期程度ずれてきたのである。実際、北房町時代に作成された、ある年表には、荒木山東塚古墳は四世紀の枠内に示されている。

古墳時代の始まり時期がずれてきた後の一九九二年に出版された『北房町史』では、おそらく古墳時代の最古級の古墳は奈良の箸墓古墳であるという前提で、それが三世紀中頃の築造とすると、荒木山東塚古墳の築造時期を、「前方部の形態も同じであることから、ほぼ同じ頃築造されたと推定」しながらも、箸墓古墳築造のしばらく後の「三世紀終わり頃」としたのであろう。これは、大和政権による地方支配の段階的拡大から、畿内で発生した前方後円墳も同心円状に各地に拡大していった、という当時の定説を考えればうなずけるものである。

いずれにしても、考古学の専門家がその時々の定説および最新の研究成果等も意識しながらそう判断されているのだから、大きく間違ってはいないのだろうが、内心はもう少し確からしい根拠があったらなあと、素人考えで思ってしまう。

例えば、箸墓、車塚、そして荒木山東塚古墳の築造は、たぶんその順であろうと多くの人は断定するだろう。しかし、本当はどうだったのか、今は誰にもわからない。根拠となる科学的データがあまりにもないことに加え、その後の各地の古墳発掘結果等により、前方後円墳は同時多発的に発生した可能性があるという説も出てきている。こうしたことを考えれば、前方後方墳の荒木山東塚古墳が、三つの中で最も古い古墳であるという可能性は、少なくともゼロではないはずである。

（平城　元）



【首長墳の変遷】

（北房町史から）

１が荒木山東塚，２が西塚古墳

【北房町史と
吉備の古墳(上)・(下)】

（以下は、次号掲載となります。）